

語彙	仮名表記	解説
相方積	あいかたづみ	沖縄の石積の基本的な手法の一つ。亀甲乱積ともいう。それぞれの石を互いにかみ合うように削り合わせて積む方法で、石積手法としてはもっとも進んだもの。
東御廻り	あがりうまい	沖縄本島南部地域（現在の与那原町と南城市の佐敷・知念・玉城）の御嶽や井泉などの聖地を巡拝する祭礼。大里・佐敷・知念・玉城の四間切は、王府時代からアガリカタ（東方）と呼ばれるため、この地域にある聖地を廻ることは東御廻りと呼ばれる。現在は門中単位で行われるのが普通である。首里の圓比屋武御嶽から始まって、与那原の浜の御殿・親エー川ガー、馬天御嶽、佐敷上グスク、御テダ御井泉、斎場御嶽、知念グスク、知念大川、玉城グスク、玉城ノ口殿内、ミントウグスク、受水走水、ヤハラチカサ、浜川御嶽と廻った。その原形は、農耕の起源神話に基づく国王・聞得大君の「知念・久高行幸」に求められると思われる。
按司	あじ	スク時代（12～16世紀）の初めに登場した武力を背景とした地域支配者。グスクを根拠地としてその周辺及び近隣地域を支配した。彼らは域外との交易で富を集積すると同時に、相互に争い、自らの権力を拡大していった。これが14世紀には中山・南山・北山の三小国家としてまとまり、三山時代となった。第二尚氏の尚真王（生没1465～1526年）によって首里に集住させられ、その後、王府の身分・位階制に組み込まれた。『おもろさうし』には「あぢ」「あんじ」の表記で多数出る。国王は「あぢおそい／あんじおそい」（按司襲い）と尊称された。
アジシー	あじしー	門中の遠い先祖を祀ったとされる墓で、アジ墓とも称する。その多くは岩穴を利用した横穴式で、正面を石垣積みした古墳である。これに対して、それ以降の先祖は、当世墓と称される墓（形状としては破風墓や亀甲墓など）に祀られる。当世墓が現在も使用中の墓であるのに対して、アジシーは清明祭などの拝み墓として使用されている。
安次富加那巴志（安次富金橋）	あしとみがなはし	第一尚氏王統第六代国王尚泰久の長男と伝わる。
アブシバレー	あぶしばれー	4月に行われる虫払いの村落祭。稲が結実する前の4月に、畦の雑草を刈り、害虫が少なく豊作になることを祈願した。海に近い地域ではバッタや蝸牛などを捕らえ、草木で作った小船に入れ干潮時に沖に流す儀礼があった。内陸の地域では害虫を殿などで焼いた。現在、玉城字親慶原や玉城字喜良原では5月にアブシバレーの祈願が行われている。
マミキヨ	あまみきよ	琉球神話の創世神。『中山世鑑』（1650年）冒頭の「琉球開闢之事」に「阿摩美久」と出る。天帝の指示により辺戸の安須社はじめ琉球中の全ての杜（御嶽）を造ったとある。『おもろさうし』巻2以下に「あまみきよ」と出る。アマンチュ・シルンチュと併称され、神として祀られている。
アミシ	あみし	の収穫後に行う豊作の祝祭。トシアミ（年浴）、六月カシチー、ミーメー（新米）御願とも称する。1735年に王府により祭日が6月25日に定められた。年浴では、井泉の水を浴び、収穫した新米でカシチー（強飯）を作って仏壇や火叉神に供え、豊作を祝った。現在、字新里・字志喜屋・字垣花・大城区の他、多くの地域の村落祭として行われている。
アミドゥシ	あみどぅし	久高島において、11月13日に行われている追い込み漁を伴った漁撈祭。アミドゥシの語義は、「網降ろし」説と、友人（ドゥシ）たちで追い込み漁することに由来する「網友人」説のふたつがある。ソールイガナシと呼ばれる漁撈に関わる男性神役が中心的役割をはずす。知念字久手堅と知念字山里には久高島と同じく11月13日にアミウルシ（「網ウルシ」という行事があったことが報告されており、また、津堅島では11月13日から17日までの行事を「アミドゥシ（網同志）」と呼ぶ。
イザイホー	いざいほー	久高島で12年ごとの午年に行われてきた祭事で、11月15日から4日間が本祭り。1978年を最後に、以後は行われていない。イザイホーの語源についての定説はない。久高島は30歳以上の全女性が加入する村落祭祀組織を有し、イザイホーはその祭祀組織に加入するための儀礼である。本祭りは、御殿庭と呼ばれる集落のはずれにある祭場（広場）を中心に行われる。女性たちは、御殿庭の背後のイザイヤマに臨時に造られた「七つ家」と呼ばれる小屋に4日3晩籠もり、その間、御殿庭に登場しては村人や島外からの見学者の眼前で様々な儀式を繰り広げる。
イシジシ(石獅子・火返し)	いしじし	石製の大きな獅子像で、村落の守り神として村の出入り口や、村外れの高台などに置かれた。石獅子が置かれ始めたのは17世紀の末頃からで、中国から伝わったとされる。獅子は火伏せの力や、外からの邪気や悪霊などを返す力を持つものと信じられた。石獅子は、本島南部地域に多数残っているが、なかでも南城市域には四つ足立ちの獅子像が多い。
イビ	いび	御嶽の最奥部にある最も聖なる所。一般に、神の在所とされ、琉球石灰岩の切石やサンゴ石を削って作った香炉を置く。所によってはご神体として石が立てられている。また、香炉の向こうにはクバやマー二などの聖木が生えているのが普通である。『おもろさうし』に「いべのいのり／つかさいのり」（イベの祈り／司祈り）と出る（巻1-34など5例）。オモロでは神への祈願をするという意で、御嶽の神を言っている。『琉球国由来記』に御嶽の「神名」（聖名）として「～イベ」と用いられている。八重山ではウブともいう。「威部」は当て字。

語彙	仮名表記	解説
『遺老説伝』	いろうせつでん	首里王府編の漢文による説話集。『球陽』の外巻として編集された。成立は1745年か。全4巻、142話収録。北は国頭から南は与那国までの説話を収録。これは王府の指令によって各間切が「遺老」の伝える「説伝」を提出したことによる。142話のうち多くが『琉球国由来記』収録の説話と重なり、「仲里間切旧記」「宮古島旧記」「八重山諸事由来」「佐銘川大ぬし由来」の記事なども重なる。「睡虫次良」(8項。ニーブイムシジラー)や「屋良無漏池の大蛇」(56項。ヤラムルチの話)、「白銀岩由来」(136項。白銀堂の由来)など、人口に膾炙(かいしゃ)した話も多い。
ウイミ	ういみ	シチビ(節日)ともいわれ、ウイミ・シチビと併称して使われることも多い。年中行事など実施時期が決まった行事・儀礼のことを指している。もともとは生業である農業暦とのかわかりが深く、生産休養日としての「遊び」を伴う収穫祭や予祝行事の日のことであったが、最近では年中行事などハレの日のことをさして使われるようになっている。
ウグワン(御願)	うぐわん	ウガン、ウガミともいわれる。神霊や先祖に対して祈願すること、願をかけること。その儀礼や行事のこと。村落単位から家庭・個人単位でも行われる。行事に先立って行われるものや年頭に行われるものを御願立て、行事の後や年末に行われるものを御願解きという。酒や米などの供物を供え、線香をたいてグイスを唱える。
ウグワンダティ(御願立て)	うぐわんだてい	ウガンは、ウガミ(拝み)の転訛した語で、神霊や祖先に対する祈願を意味する。年のはじめに家の神霊に対して1年間の願立てをするのを御願立てといい、年末に行う願解きの儀礼を御願解きという。久高島では、村落レベルの願立てと願解きのことを、それぞれ「ウブヌシガナシのウガンダティ」、「ウブヌシガナシのウブクイ(シディガフーとも)」という。
ウグワンプトゥチ(御願解き)	うぐわんぷとうち	12月24日に各家庭において1年間の御願を解く日とされる。道教の竈神信仰の影響でこの日には火ヌ神が昇天し天上神に1年間の報告をするためとされるために、特に台所を綺麗にして火ヌ神にウチャヌクやウブク(小さな椀や湯呑に赤飯を盛り付けたもの)など供物を供えて送り出すことに気を配る。火ヌ神に供えたウブクは男性がウサンデーすること(神仏への供物を祭祀後いただくこと)は禁忌とされている。
ウコール(御香炉)	うこーる	神仏に線香を捧げる際に使う道具。陶器製の丸いものや、戸外でよく見られる石やコンクリート製の四角いものもある。戸外のものを使う場合、線香は立てず寝かせるようにして捧げる。
ウタカビ(御崇べ)	うたかび	祭祀で神に捧げられる祈願の言葉。日本の「祝詞」に相当する。語源は「崇べ」で、神仏を崇め敬うことをいう。これに接頭語の「御」を付けたもの。御嶽などの聖地・拝所での祭祀は、冒頭で神女が神を崇め、祭祀の目的・願意を述べるが、その聖なる言葉がウタカビである。火ヌ神などの家庭内の祭祀で唱えられる言葉もそうである。奄美・宮古・八重山ではタハブエ・タービ・タカビなど「御」を付けない。宮古では祖神を祀る祭祀歌謡、八重山では新築祝いの儀礼歌謡として謡われる。『南島歌謡大成1沖繩篇上』に202編が収録されている。
ウタキ(御嶽)	うたき	神を祀る聖地で、琉球・沖縄の精神文化を特徴づける重要なものの1つ。一般に村の後方の丘や山にあり、村を守護する形で存在する。1番奥にイベ(イビ)と呼ばれる至聖所がある。イベには香炉が置かれ、神はここに宿るといふ。『中山世鑑』の「琉球開闢之事」では、アマミキヨの国土創造は辺戸の安須社から始まって「島々国々ノ、嶽々森々ヲバ、作りテケリ」と語られる。『おもろさうし』には「こぼうたけ」「さやはたけ」など各地の御嶽が謡われている。『琉球国由来記』には王府公認の御嶽が900以上ある。現在その数は不明だが、2000近い。
ウチャナク(お茶の子)	うちやなく	ウチャヌク。祭祀や御願の際に用いる供物の餅。大中小の3段重ね3セット餅のこと。
ウトウーシ	うとーし	ある特定の神霊や拝所に対して、その場所ではなく、遠く隔たった位置から遥拝すること。首里汀良町の立陵にある弁ヶ嶽という御嶽は、久高島と斎場御嶽への遥拝所である。『琉球国由来記』では、久高島の伊敷泊(浜)は「ギライ大主」と「カナイ真司」の2神が祭神だと記されるが、ギライカナイ(現在の久高島ではニラーハナー)は海の彼方の神々の世界であるから、伊敷泊は、ニラーハナーへの遥拝所ということになる。台所で祀られる火ヌ神が、外界の特定の神などへの遥拝の機能をはたすこともある。
ウファガリジマ(大東島)	うふあがりじま	琉球神話における開闢神であるアマミキヨの郷で、ニライカナイの別称ともされる。大東島は、東方海上の楽土で、豊穡・幸をもたらす神の原郷であると考えられている。なお、この大東島は、現在の北大東島および南大東島のことではない。
ウブヌシガナシ(大主加那志)	うぶぬしがなし	ウブヌシ(大主)に尊称を意味するカナシが付いた、久高島で民俗信仰に関わる用語。久高島にはニラーウブヌシ、アガリウブヌシ(東ウブヌシ)というニライカナイ(久高ではニラーハナー)と関わりを有する神職があった。また、1年間の村落の願立てを「ウブヌシガナシのウガンダティ」、それと対になる12月の願解きを「ウブヌシガナシのシディガフー(ウブクイとも)」という。

語彙	仮名表記	解説
ウブミジ(産水)	うぶみじ	生まれた赤子の初めての沐浴に使う水や、その額にミジナディーをするための水のこと。ウブミジ(産水)を汲んできてその水を用いてウブメー(産米)を炊いたり、生児の枕元に置いたりする地域もある。その水を汲むカーのことをウブガー(産井泉)といい、正月の若水も死水も同じ井泉から汲むことが多いが、死水を汲む井泉とは明確に区別されている地域もある。
ウマチー	うまちー	沖縄諸島において、二月ウマチー(2月15日)、三月ウマチー(3月15日)、五月ウマチー(5月15日)、六月ウマチー(6月15日)の4つの祭祀のこと。『琉球国由来記』には2月の麦穂祭、3月の麦大祭、5月の稲穂祭、6月の稲大祭とみえる。穂祭は、麦・稲の成熟を祈願し、大祭はその収穫を感謝する祭である。かつては穂祭の前には、穂の結実を妨げないための物忌み(鳴り物法度など)に服した。国王や聞得大君が行う国家の穂祭として、2月に久高島での麦のミシキョマ、4月に知念・玉城における稲のミシキョマがあったが、17世紀の後半に廃止された。
ウンサク	うんさく	麦穂祭や稲穂祭などの村落祭祀における供物の1つとして、御嶽や殿あるいは神アシャギなどに供える神酒。供物の酒には2種類があり、御五水と称する既成の泡盛と、村人がかつて米や麦、芋などで手作りしたウンサク(神酒)がある。沖縄諸島ではウンサク・ミキ・ジンス、宮古ではンキ、八重山ではミシャグなどと称する。ウンサクはかつて女性が口噛みで作った。『琉球国由来記』巻3「神酒(米奇)」の項によれば、煮た米粉に婦女が口噛みした生米を混ぜ入れ発酵させる、とある。口噛みの習俗は明治期にはすたれたという。近年では米汁に砂糖を加えたものや、市販の乳濁色の飲料が代用されている。
ウンチケー	うんちけー	招待、案内すること。お連れするという意味。ミーユミウンチケーで花嫁迎えをさし、クチウンチケーで改葬のために骨を移動することをさす。旧盆前のタナバタに墓掃除・墓参りをするのは、ウヤファーフジ(祖先)へ旧盆のウンチケー(ご招待)をする意味もある。拝所を何らかの理由で移動する際にもウンチケーと表現する。靈魂など目に見えないものの移動にも使われる。
オアラオリ(御新下り)	おあらおり	聞得大君の即位儀礼。9月吉日に斎場御嶽で行われた。「新下り」は、神霊が新たに依り代に下おり懸かる事をいうが、新しい神女がセジを受けて即位する儀礼(大宜味村塩屋では「新神下がり」という)のこともである。当日早朝、首里の聞得大君御殿を出発し王城で国王に挨拶の後、総勢約200名の行列で与那原親川に至り、「御水撫で」を行う。佐敷のユックイ坂を登って午後9時頃に斎場御嶽に到着。午前0時に70名の神女が御嶽に入り、久高島外間ノロにより「御名付け」(セジの継承)が行われた。数々のクェーナが謡われ荘厳な儀礼であったという。
沖縄史蹟保存会	おきなわしせきほぞんかい	貴重な史跡を住民に紹介する目的で、郷土史研究者たちによってつくられた民間団体。史跡に標柱を立てるなどの活動をした。1922年発会、1949年解散。
オボツ・カグラ	おぼつ・かぐら	奄美・沖縄の他界観の1つ。『おもろさうし』に「おぼつ/かぐら」の対語の形で多数例がある。そこではニライ・カナイが水平方向の他界であるのに対し、垂直方向の他界である。理想的世界と考えられていたらしい。『中山世鑑』にも「ヲボツカグラノ神ト申スハ、天神也」とある。だが、『琉球神道記』には「天ヨリ下リ給フヲニライカナイキンマモント称ス。海ヨリ上リ給フヲオボツカクラキンマモント称ス」とあり、混乱が見られる。奄美ではトネヤ(祭場)の後方の山等をオボツ山と呼ぶ。オボツカグラは宮古・八重山にはみられない。王府の王権思想との関係が考えられる。
『おもろさうし』	おもろさうし	首里王府編の祭祀歌謡集。全22巻、1554首のオモロを収録する。古琉球の思想・民俗・社会・言語などを知る上で必須の文献である。少なくとも3回の編纂により成立したとみられ、第1巻が1531年、第2巻が1613年、第3巻以降が1623年の成立である(巻11・14・17・22の4巻は不明。巻22は他の巻のオモロを寄せ集めて成立)。その内容は、聞得大君はじめ三十三君とされる君神や地方の神・神女の行う祭祀、国王・王権の祝福、国家の事業の祝福、航海の予祝、地方の豪族の讃美、貢納など種々の出来事を謡っており、多彩である。
カー(井泉)	かー	湧泉のことで、その多くは村落祭祀における拝所となっている。はるか昔の村の先祖は、水の得やすい場所に村建てしたと考えられ、命と生活の源ともいえる水の恵みに感謝するために、またその永続を願って拝まれた。カーはその機能や形態、形状から様々な名称が付けられている。例えば、産水を汲む井泉をウブガー、ノロの使用した井泉をノロガー、禊のための井泉をソージガー、村の発生と関わる井泉をエーガー、崖下等へ下りて水を汲むウリガー、岩間からの湧水を掛樋で引いた樋川などである。また、村落内の小字名や、アガリヌカー(東の井泉)などのように、場所や方位を冠して呼ばれる場合もある。
カシチー	かちしー	カシチーは強飯のことで、カシチーを主な供物にする行事のこともカシチーという。カシチーは6月25日と8月10日の2回ある。6月25日は稲の収穫後の行事で、新穀の糯米を蒸したカシチーをつくり仏壇や火又神に供える。その日に綱引を行う村も多い。8月10日のカシチーは、小豆をまぜた赤飯のカシチーを作る。『球陽』尚敬王23(1735年)の条には、南風原間切兼城村の内嶺按司の娘が墓から蘇生したことにちなむ8月10日のカシチーの由来譚が載っている。

語彙	仮名表記	解説
カニマン(鍛冶の神)	かにまん	鍛冶屋跡などに祀られた鍛冶の神。金満の字をあてることもある。生業である農業をするうえで重要な鋏や鎌などの農具や、生活に欠かせない生活用品を製作するゆえに、鍛冶屋は各間切に置かれた。鉄を打つために使われる鞆の祭がフーチヌユーエーと呼ばれ11月7日に行われた。
ガヌエー(竈の祝い)	がぬえー	竈の祝いのことをガヌエーもしくはガンヌユーエーといい、竈を所有している集落では、毎年8月9日頃、竈が納められている竈屋に酒、豆腐や肉などの供物を供えてお参りした。それとは別に、竈を新たに仕立てた時や修繕した際、年回りで(12年に1度)ガヌエーを行った。南風原区のガンヤー祝いは毎年行われる。
カママーイ(竈廻り)	かままーい	火災予防のための点検と祈願行事。ヒーマーチの御願ともいう。『琉球国由来記』には10月1日に行うとある。ノロをはじめ神人が、出火の事故がないことを拝所で祈願した。戦後しばらく各家では竈や屋敷内外の清掃をし、各字役員が竈を点検して回った。南城地域では、玉城字糸数(ヒーマーチの御願)と知念字知念(カママーイ)で行われている。
カミンチュ(神人)	かみんちゅ	カミンチュは「カミ(神)」と人を意味する「チュ」を結合させた語で、村落や門中の神行事に関わる宗教的職能者のことである。男の神人もいるが、ほとんどは女性である。各村落には神人の組織があり、沖縄本島地域では、王国時代は王府によって任命された各村のノロが神人組織の最高位に位置した。ノロの下位には、ニーガン(根神)など複数の神人がおり、神人の継承においては、血筋や家筋が考慮されるのが一般的である。門中における神人は、クディとかクディングアとかいい、一般に門中の本家で祀られる始祖や遠祖をその神としている。
カムイヤキ	かむいやき	鹿児島県大島郡伊仙町阿三の山中に分布する窯跡群で生産された中世陶器の総称。窯跡群の呼称が地元の地名呼称に基もとづき、「カムイヤキ古 窯跡群」とされたことから、カムイヤキと呼ばれる。
ガン(竈)	がん	遺体の入った棺を墓まで運ぶ興のことを竈という。地域によってアカンマー、ウフンマー、ヤギョウ、コーなどと呼ばれる。竈を使用する前後には祈願を行った。竈が使用される時は人が亡くなった時であるため、竈屋に納める際には、しばらく使うことが無いことを願った。竈は集落単位で所有したが、竈を所有していない集落は近隣の集落から借用していた。火葬が普及した現在でも竈とそれを納める竈屋が残っている地域があり、祭祀行事が行われている。
カンノンドウ(観音堂)	かんのんどう	観音菩薩を本尊として祀る堂。1618年、首里の慈眼院に観音堂が初めて建立され、それ以降、金武観音寺や久米島、八重山の観音堂などで観音像が安置された。王家の観音堂参詣の影響もあって、18世紀には農村でも観音信仰が浸透した。門中でも観音像が祭壇に祀られるようになった。南城地域では、玉城字奥武の観音堂が有名である。
聞得大君	きこえおおきみ	琉球国の最高神女。尚真王時代に創始された。ヲナリ神信仰に基づくもので、尚真の妹オトトノモイカネがその初代に就任した。原理的には、国王をヲナリ神が守護するという考えである。『おもろさうし』の巻1-3にはそれが明確に語られている。後代になると王女・王妃・王母などが就任するようになる。聞得大君御殿の神壇には、国家守護のための、聖なる火を祀る「御火鉢の御前」、「御セジの御前」、「金の御セジの御前」を祀る香炉があり、また中央奥には弁財天の掛け物があった(『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇)II 民俗・宗教』p.44)。就任儀式である「御新下り」は斎場御嶽がその主要舞台となった。
『球陽』	きゅうよう	首里王府編纂の琉球国の正史。1745年、鄭秉哲・蔡宏謨ら4人によって編集された(巻1「国初」～巻14の尚敬王33年まで)。それ以後は年次を追って記事を書き継ぎ、最後の国王尚泰の29年(1876年)で終わっている。漢文文献で、「正巻」が22巻、附巻が4巻の全26巻からなる。『中山世鑑』『中山世譜』が王代記の体裁を取るのに対し、編年体で王府の政治・外交・経済・制度の改廃、琉球国内で起こった事件・事故・天体異変・異常気象、長寿や儒教倫理督励のための褒賞等の記事を実録風に記す。『遺老説伝』は「外巻」として編集された。
グイス	ぐいす	祈りの言葉。呪文。神仏に祈る際に述べられる言葉で、家庭におけるウガンの際に唱えられるもの(多くの場合主婦等の女性による)だけでなく、ユタがウガンの際に唱えるものも指す。ユタのグイスは早口で小声で唱えられるためあまり聞き取ることが出来ない。家庭では対象となる神仏の名を呼ぶことからはじまり、何のためのウガンなのかを述べ、家族の紹介をする、など手順が決まっている。
クサイ(対)	くさい	チュクサイで、一対、一式、一連、一セットの意。屋比久では、「イッチュー(一組)」と言われる。なお、屋比久では床の間と屋敷のフンシーはチュクサイといわれた。
クサティ(腰当)	くさてい	もたれること、頼ることの出来るものの意。夫のことをクサティという地域もある。集落後方にある山や丘などをさしてクサティムイという。そこには集落の御嶽がある。古い家ほどクサティムイに近い所にある。クサティムイを背にして北風から護られる(抱護される)形で集落が形成された。風水思想の影響と捉えるとクサティは玄武に相当する。
クシユクワシー(腰憩い)	くしゆくわーしー	クシユクイとも称する。農作業(稲の植え付けやサトウキビの収穫後など)の一段落ついたあとと慰勞のため集落中が一斉に作業を休むこと。遊びを伴い、ご馳走を用意して歌や三線に興じる。

語彙	仮名表記	解説
グスク(城)	ぐすく	奄美・沖縄に広く存在する、按司などの支配者に関する石積みの城郭や遺跡、王府の公倉あるいは要塞、また、信仰の対象としての聖地をいう。一般的には小高い丘の上や山中等の高所に立地するが、海浜に存在する例もある。現在、300以上の存在が確認されている。『おもろさうし』にすでに「知念社ぐすく あまみきよが 宣立て始めのぐすく」(巻19-1311)などが出る。「城」の字を当てている例(巻19-1020)もある。琉球史の時代区分の一つである「グスク時代」(12～16世紀。一部地域では10世紀頃から始まるとする)はその歴史的意義による命名。
クドゥチ(口説)	くどうち	琉球歌謡の一ジャンル。大和から流入してきたもので、5音と7音で句が構成される。本来は口説の「本句」(一節が7・5・7・5・7・5の6句)の部分と「口説囃子」の部分からなる。現在は「本句」の部分のみで歌唱・演奏されることもある。土地誉め、教訓、道行き、物語(叙事)など様々な内容を歌うが、本土のように恋愛を歌うものはない。
クバ	くば	ヤシ科の常緑高木で、ピロウ、フバ(久高島)ともいう。クバの木が生えている御嶽が数多く見られるのは、クバが神聖な植物と見なされていたためである。『琉球国由来記』記載の御嶽には、御嶽名あるいは神名に植物名が使用される例が少ないが、最も多く使用されている植物がクバ(コバ)である。久高島の御嶽名の「コバウノ森」(島ではフボー御嶽)、神名の「コバツカサ」(コバウノ森にあるイビの1つ)はその1例である。久高島ではフバワク(フバの木の葉を切って整えるの意)という名の行事が11月に行われてきた。イザイホーでは、神アサギの壁としてクバの葉が用いられた。
郭/曲	くるわ ※郭は「かく」とも読む。	軍事・政治的な意図をもって、削平・盛土・石積などで画された区域。
クングワチクニチー(九月九日)	くんぐわちくにちー	9月9日に行われる行事のこと。地域あるいは家によっては、菊の葉を浮かべた酒を火又神や仏壇に供えて家族の健康を祈願してから飲む習慣がある。ピジュルを祀っている村では、ピジュルの祭日が9月9日である例が多い。
クンチャサ	くんちゃさ	久高島に伝わる伝説上の神女で、クンチャサヌルともいう。第一尚氏最後の国王である尚徳が久高島に行幸したときに、大里家の娘であるクンチャサと恋仲となるが、尚徳が久高滞在中に首里で金丸によるクーデターが起こった。首里に向かう途中の船で「時既に遅し」と知らされた尚徳は、海に身をなげて自害し、クンチャサも輪死した。それ以降は、大里家はノロ(ヌル)を出す家系から根神(大里根神)を出す家系へと降格となり、ノロは外間家から出る外間ノロの時代となったという。大里家は穀物起源神話とも関わる旧家である。
虎口	こぐち	城の出入口および城を構成する郭の出入口を指す。城攻めの勢力に対して、防御と攻撃の両面で重要な機能を果たす。
サシイシ(差し石)	さしいし	力石。力試しに使われる石。人々が集まる集会所や四辻などに置かれた。若者たちが力自慢をするために競い合った。丸みを帯びた持ちづらい形状のものが多く、力だけでなく持ち上げるコツも必要であった。
さめがわおおぬし(佐銘川大主)	さめかわおおぬし	第一尚氏の始祖。サミカーウフスーとも称する。「佐銘川大ぬし由来記」(成立年未詳。『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇)II 民俗・宗教』p.645)によると、「伊平屋伊是名島」に生まれ農夫として暮らすが、島人に責められ島を脱出。佐敷に渡って来て大城按司の娘と結婚し、子供(苗代大親＝尚思紹)をもうけた。島からの脱出などのモチーフは、第二尚氏の始祖、尚門王の伝説と重なる。
サングワチサンニチー(三月三日)	さんがわちさんにちー	3月3日に浜に下り、潮に手足を浸して災厄を祓う行事。アカマター伝説に由来し、女性が心身を清める日とされる。浜下り、サングワチャーともいう。村もしくは各家で浜に行き、蓬フーチ餅ムチや重箱料理などのご馳走を食べ1日を楽しく過ごした。字の婦人たちが新盛の供物を携え各拝所を祈願した後、公民館で1日楽しく遊ぶ地域もある。
ジーシガーミ(厨子甕)	じーしーがーみ	骨を納める容器。かつて沖縄では人が死ぬと風葬し、一定の期間が過ぎた後にジーシガーミに納めるという改葬が行われていた。ジーシガーミは、その改葬後の骨を納める容器で、現在の火葬骨を納める骨壺と比べるとかなり大きい。骨を洗い清めるという洗骨習俗の行われる地域ではその洗骨後の骨がジーシガーミに納められた。形状には、家型や寺院を模したものや、坊主頭のようなツルンとしたポージャーがあり、また、材質においても石製や陶器製などがあるゆえに、ジーシガーミは多様であるといえる。火葬が普及した現在でも古い墓の中には厨子甕が残されていることが多い。かつて死後の夫婦は同じ甕に納められるとされた。
シーミー(清明祭)	シーミー	3月の清明節の節中に先祖の墓に参り、供養をする行事。『球陽』尚穆王十七年(1768年)の条に、この朝にならって清明節に玉陵に参詣することが定められたとある。以後、清明祭は首里士族から沖縄本島農村部へ普及したようで、宮古や八重山では定着していない。清明祭には各家でお墓参りをするものと、門中やバラ(腹)で行う神御清明がある。神御清明は、宗家の当主や門中神人を中心に、門中の遠祖や伝承上の祖先の墓などを巡拝する。南城市では、宇佐敷や宇安座真、宇仲村渠、西原区等で、村落祭祀として清明祭が行われている。

語彙	仮名表記	解説
ジーンチュ(地人)	じーんちゅ	地元の人、その土地の人という意。近世地割制下で土地の配分を受け、土地を耕し税を納める、集落構成員としての農民のこと。
シシマイ(獅子舞)	ししまい	獅子に扮して演じる舞い。2人1組で演じ、1人は獅子頭と前足、もう1人が後足と尾を振る役を担当する。中国から伝わった芸能とされ、獅子は、悪霊を祓う力を有する霊獣として尊崇された。現在、沖縄本島では盆や八月十五夜、宮古や八重山では豊年祭などで演じられる。南城市域では、大里稲嶺区や大里中間区、佐敷字津波古、玉城字玉城、玉城字志堅原などで行われている。玉城字志堅原は、獅子毛調べという、獅子の手入れをする祭祀も行っている。なお、玉城字中山でもかつては行われていた。
シチグウチ(盆7月13～16日)	しちぐわち	各家や門中において7月13～16日に行われるお盆の行事。盆に先立ち、7月7日の七夕の日(現在ではその前後の休日)に、先祖を迎えるための墓掃除を行う。13日をウンケーといい、仏壇に果物などを供え、門前でローソクを灯し線香をあげ、先祖をお迎えする。14日を中日、15日(地域によっては16日)の最終日をウークイという。ウークイの日は、夕刻以降、家族や親族が集まり、仏壇に重箱料理を供え、線香やウチカビ(紙銭)を焚き、送りの儀礼を行う。盆の期間中、沖縄本島の中部ではエイサー、八重山ではアングマなど青年たちによる集団演舞が行われる。
シディガフー	しでいがふー	久高島で、12月に行われる1年間の願を解く行事をシディガフーといい、シディガフーは、年始めに行われるウグワンダティと対になる行事である。久高島では、門中単位で行うウガンダティとシディガフーもある。
ジトウ(地頭)	じとう	琉球国時代の役職名。王府から領地を与えられる士族である。一間切を領する者を「総地頭」という。総地頭には按司身分の者もあり、これは「按司地頭」と呼ばれる。この2つの地頭を称して「両総地頭」という。一村(現在の字に相当)を領する者は「脇地頭」という。地頭は自分の領する地方に下って行政を行うことはなかった。
ジトゥデー(地頭代)	じとうてー	近世から近代期(明治30年)までの琉球・沖縄にあった地方行政職。村長に相当する。琉球国時代、王府は各間切に按司地頭と総地頭の両総地頭をおいてその領地としたが、その“地頭の代理”として、王府は間切の有力者に命じて行政に当たらせた。身分は百姓であるが、親雲上の称号を得た。百姓の最高位である。
シニミジ(死水)	しにみじ	臨終に際して最後に口に含ませる水や、死者の湯かん・沐浴に用いられる水のこと。ウブミジを汲むのと同じ井泉(産井泉など)からくまれることが多い。湯かんの際には水にお湯を足す逆水(サカミジ)という方法がとられたり、使い終わった水を捨てる場所も決まっているなど、シニミジに関する作法は地域によって厳格に決まっていた。
シマクサラシ	しまくさらし	シマクサラサーという村もある。村単位で牛や豚を殺し、その肉は村の人々が食し、その骨は集落の入口となる場所数カ所まで道に張った縄に吊し、その血は植物の枝葉に付けて道に張った縄や家屋の壁に塗り、その後その枝葉を家の門や軒下に挿すという行事。邪悪なものが集落に侵入することを防ぐための儀礼とされ、骨を吊すのは、外から侵入しようとする邪悪なものに対して、縄の内側にいる人々がすでに肉食し、備えが十分であることを示す意味があるものと思われる。佐敷地区でカンカーと呼ぶ行事は、シマクサラシと同種のものである。
ジューグヤ(十五夜)	じゅーぐや	ジューグヤは十五夜の意味であり、8月15日の夜に行われる村遊びのことをジューグヤとか、ジューグヤアシビ(十五夜遊び)と呼ぶ村は多い。村遊びでは、その村に伝わる伝統的な獅子舞や棒術、踊り等の芸能が演じられる。
ジュールクニチー(1月16日)	じゅーるくにちー	1月16日に行われる先祖供養の行事。十六日祭は、後生(あの世)の正月といわれ、古くからあった行事で、沖縄全域で行われている。ただし、1768年に琉球の王家が中国の墓前祭を受容したことで、沖縄本島では十六日祭より清明祭が普及した。本島から離れた宮古や八重山、久米島などでは、現在も十六日祭が大きな墓参り行事として行われている。
尚志魯	しょうしろ	第一尚氏王統(1429～1469年)の第5代国王尚金福(1453年没)の子。王の死後、王位を継ごうとしたが、叔父布里との間で争いとなり(「志魯布里の乱」1453年)、これで没した。
尚泰久	しょうたいきゅう	第一尚氏王統の第6代の王(在位1454～60年)。「万国津梁の鐘」を铸造したことは有名。尚泰久のあと第7代目の王位に就いたのは側室の子、三男の尚徳だった。そのため、正妃の子供の長男安次富加那巴志(安次富金橋)、二男美津葉多武喜、四男八幡加那志、長女百度踏場は首里から玉城の富里に移り住んだといわれ、玉城字富里の仲栄真殿、玉城字富山の屋良に祀られている。
尚巴志	しょうはし	生没1372～1439年。第一尚氏(1429～1469年)第2代国王(第1代は父・尚思紹)。島添大里按司を滅ぼして(1402年)佐敷・大里を平定。その後中山の武寧王を討ち(1406年)、次いで北山王攀安知を滅ぼし(1416年)、最後に南山の他魯毎を討って三山を統一した(1429年)。その知勇は次の話で語り継がれている。①所有する名剣と馬天に入港した大和船の船載する鉄塊を交換し、これで農具を作り民に与え民心を掌握した。②南山攻略に当たっては、自らの所有する金屏風と南山のカデン井泉を交換し、自らに従う者にのみその水利を認め、民心が他魯毎から離れるようにした。

語彙	仮名表記	解説
尚布里	しょうぶり	第一尚氏王統(1429～1469年)の第2代国王尚巴志の第6子。第5代国王尚金福の死後、王位を主張して甥の志魯と争いとなり(「志魯布里の乱」)、これで没した。
シラタルー	しらたるー	久高島で神話上の男性始祖。久高島の神話では、島の始祖となったのは沖繩本島の玉城出身のシラタルーとファーガナシという兄妹だという。ハンジャンシという来訪神祭祀で歌われる歌謡では、シラタルー夫婦が久高向けに出発したのは、「百名のエーバンタ」だとされる。また、『遺老説伝』所収の説話には、玉城間切百名村の白樽という男が、玉城按司の長男である免武登能(ミントゥン)按司の娘と結婚して久高島に渡ったとある。
シルカビ(白紙)	しるかび	拝所や墓などで祈願に用いる白い紙。書道用の半紙を8分の1に切って使用することが多い。井泉などの祈願で線香を焚かない場合に、線香を寝かせ置く台紙として使われる場合が多い。線香を焚く場合には通常は使用されない。白紙がいつ頃から用いられるようになったのかは不明である。
青磁	せいじ	磁器の一種。微量な鉄分を含ふくも釉薬をかけて、還元焰焼成をすることにより、青緑色に発色させる。
石灰岩	せっかいがん	炭酸カルシウム(CaCO ₃)を主成分とする白・灰色の堆積岩。南西諸島に広く分布する第四紀更新世石灰岩の大部分は、琉球石灰岩と呼ばれる。
ソールイガナシ	そーいがなし	久高島の漁撈に関する男性神職名。年齢によって就任する神職で、2名いて任期は2年、60歳前後に役がめぐってくる。就任すると自宅に祭壇が設置され、香炉と網、サシカと呼ばれるサバニの内部に張られる横板のミニチュアが飾られる。漁撈の際の指揮棒だとされる棹(ソールイの語義は「棹取り」という説がある)が屋敷内に設置されたウドゥンガー(御殿小)と呼ばれる場所に立て置かれる。三月チナ(3月3日)、アミドゥン(11月13日)などの漁撈に関する儀礼で中心的役割を担う。
タナバタ(七夕)	たなばた	7月7日の七夕のこと。7月13日から始まるお盆を間近にひかえて、七夕の日に墓の掃除を行い、祖先に対してお盆の案内を行うのが一般的である。各家の衣装や村が保管する祭りに使う衣装などの虫干しを行う例もある。沖繩の七夕には星祭りの性格はない。
タマガエヌウプティンジ	たまがえぬうぶていしじ	久高島で、イザイホーを契機に女性たちが各家のトゥバシリで祀るようになる神霊のことで、ウプティンジと通称されることが多い。具体的には島に9つある御嶽の神で、イザイホーを経験した女性は、トゥバシリで祀られるタマガエヌウプティンジに対して家族の健康祈願を行う資格を有することになる。タマガエヌウプティンジが祀られる御嶽は、ユティンヂヤナシ、アンブシヤマ、アグルダキ、タキシユラー、ウブンディヤマ、フサタイムイ、ハンジャンヤヤマ、アカララキ、スベーラキの9つだとされる。
タントウイ(種子取り祭)	たんとうい	稲の播種儀礼。語源は、貯蔵していた稲穂から種子籾を取ること。これが種籾を苗床に下ろすことを意味するようになった。八重山竹富島では粟の播種儀礼として行われ、村を挙げての大祭礼となっている。
中山世鑑	ちゅうざんせいかん	1650年成立。摂政羽地朝秀(向象賢)による琉球国初の正史。全5巻。「序」を含め全6冊。巻頭に「琉球国中山世鑑序」があり、「琉球国中山王舜天以来世續図」「先国王尚円以来世系図」が続く。巻1冒頭に「琉球開闢之事」を置き、琉球の創成神話や神々の名称とその性格について記す。以下、尚清王までの歴代国王の事績を記す(尚真王については欠く)。舜天王の所では『保元物語』に拠って長々と「為朝伝説」を記している。巻末には「冕嶽修路碑」「添継御門北之碑」などの碑文(琉球文・漢文)や「おもろ」(大美御殿竣工祝福の時の)が収録されている。
つきしろ奉賛会	つきしろほうざんかい	第一尚氏の氏子による組織であり、1938年につきしろの宮を建立した。
綱引	つなひき	沖繩各地で豊年祭などの年中行事の一環として行われる競技。綱は稲藁を用いて作られる。雄綱と雌綱を結合させたものに、貫抜き棒と呼ばれる棒を差し入れて固定して引くのが特徴である。沖繩諸島における綱引の期日は、六月ウマチー(6月15日)、六月カンチー(6月25日)、アミシ(6月26日)、お盆(7月15日)、八月十五夜(8月15日)などである。
ティラ	ていら	ティラは、主として、信仰の対象になっている神聖な洞穴をさすが、洞穴ではなく祠の場合もある。仏教との習合もみられる。ティラと呼ばれる洞穴には人骨があり、それが神体となっているという指摘もある。ティラと呼ばれる洞穴や祠の中にある自然石をビジュルと称していることも多く、一部にビジュル信仰との習合がみられる。

語彙	仮名表記	解説
ティルル	ているる	久高島に伝わる祭祀歌謡の1ジャンル。対語・対句を用いて事柄を叙事的に表現する。イザイホーでは第1日目の「イザイホーのムトゥティルル」以下、最終日4日目の「外間ノロのティルル」まで、9篇のティルルが神女によって謡われた。いずれも祭祀の具体的な場面を謡いこむものであったり、祈願の趣旨を謡うものである。これらは音頭役を勤める、ノロの補佐役の神女が先唱し、その他の神女が復唱する形式で唱われた。9月のハンジャンナシーやテラーガーミーの時のものも入れて、『南島歌謡大成1 沖縄篇上』に34篇が収録されている（重複も含む）。
天孫子	てんそんし	琉球国の王統の神聖性をあらわす語。『中山世鑑』の伝える神話では、地上に遣わされた天帝の子男女二神の間から5人の子（男3人、女2人）が生まれ、その「長男八国ノ主ノ始也」とされる。これ即ち天帝の孫（天孫）であり、その系脈、即ち「天孫の子」が琉球国王に継がれているという考えによる名称である。
トゥーティークン(土帝君)	とぅーていーくん	中国由来の神。土地の神や農業の神と考えられている。中国道教の福德正神は土地公（トゥーティークン）と呼ばれる土地に関する神でその誕生日が2月2日である。文献資料には「土帝君」の他、『琉球国由来記』の巻12-181 大嶺村に「土地公」の由来が述べられている。沖縄で見られるトゥーティークンの祭日の多くも2月2日である。農業の神の由来として甘藷を中国から伝えた野国総官を祀っているとす地域もある。また、七宮・十二支が合祀されているということから旅に出ている人のための健康祈願や、子どもの成長祈願を行うなど多様な信仰が見られる。
トゥク(床の間)	とぅく	一番座の座敷に設けられた床の間。壁面に縁起の良い書画の掛け軸、床面に生け花が飾られる。床の間の神を祀る小さな香炉と水（酒）が安置される場合もあり、その場合には、屋敷の御願や毎月1日、15日に祈願される。床の神は、家に福德をもたらす縁起の良い神とされる。大里大城区などでは公民館のトゥクが村落祭祀の場となっている。
トゥン(殿)	とぅん	沖縄本島中南部及びその周辺離島にみられる祭祀場。久高島に外間殿・久高殿とあるように、村に1つずつあるのが普通である（仲松弥秀説。但し、この場合の村は行政上の村ではなく、それを構成する古代的村落を指す。この場合、久高島には、かつて2つの村があったことを意味する）。建物の無い例や村の根屋に設けられる例もある。香炉が置かれている他、火ヌ神が祀られていることも多い。主に五月ウマチー・六月ウマチーの祭場となる。『琉球国由来記』には巻12～巻14に各間切の「年中祭祀」の項に「殿」の名前とそこで行われる祭祀・供物・司祭者のノロ名などが記されている。巻15以下の沖縄本島北部地域では恩納間切に2例のみがみえる。北部地域ではトゥンはなく、神アシャギがある。
トゥンジー(冬至)	とぅんじー	冬至の日に行われる行事・折目。家庭でのみ行われることが多い。田芋や豚肉などを入れたトゥンジージュージーを炊いてヒヌカンや仏壇に供え家族で食する。このジュージーを食べると年を1つとったことと同じだと考えられた。これは古代からの暦法の影響で冬至を「一陽来復」、新年の始まりと考えることからきていると考えられる。
トゥンマーイ(殿回り)	とぅんまーい	五月ウマチーにおいて、ノロが管轄内の各村の祭祀場である殿を巡拝すること。神衣裳を着て勾玉を首にかけたノロが、各村の根神や根人、居神など複数の神人を伴って殿での祭祀を司祭した。明治の頃まで、ノロは馬や駕籠に乗って各村の殿に登り、村人の参加のもと祭祀を執り行った。現在ではノロの継承が途絶え、この祭祀も廃れた。
ニーガン(根神)	にーがん	村の神女の1つ。原理的には、村の草分けの家である根屋の長が根人で、そのヲナリ神となる姉妹が根神である。第二尚氏の尚真王によって始められた、聞得大君を頂点とする神女組織ではノロの下に位置づけられるが、村の祭祀では最重要の役である。『琉球国由来記』巻15-16には「瀬良垣根神」が、竈廻りの時「根神火神」を祀ったことが記されている。また、『琉球国由来記』巻5-14には、王府祭祀では首里根神が稲穂祭に関わったとある。『琉球国由来記』の巻12以降には「根神」が祭祀に関わった多数の事例がみえる。なお、『おもろさうし』には「ねがみ」という語はない。
ニーチュ(根人)	にーちゅ	村（部落）を創始したと伝えられる家の家長。村の祭祀、その他の行事で重要な役割を果たす。久高島では祭祀の時に白朝衣（シルチョウ。神衣）を着て参加する。原理的にはニーガン（根神）と兄妹関係にあり、その兄たる根人は村の「政（まつりごと）」を担当し、ヲナリ神なる根神の霊的守護を受けるものである。
ニーヤ(根屋)	にーや	村の草分けの家。また、根所と呼ぶ地域もある。この家の長は根人として男性神役を勤め、その姉妹は根神となって村の祭祀を司祭する。村単位で行われる祭祀の拠点となる。かつては村の最有力者の家であるのが普通であった。ニーヤにトゥン（殿）の香炉が祀られる例もある。
ニブトゥイ(柄杓取り)	にぶとぅい	ニブトゥイともいう。ニブ（ニープ）は柄杓のこと。村の祭祀で、桶に準備されたミキ・ウンサク（ウンサク）などを神や神女らに捧げる役。神役の1つで男性が勤める。久高島ではソールイガナシー（竿取り様。最も重要な男性神役）などと並んで、重要な役である。

語彙	仮名表記	解説
ニライカナイ	にらいかない	沖縄の祭祀において、海の彼方あるいは海底、地底にあるとされる他界のことで、ニライと単独で使用されることもあり、カナイはニライの対句表現である。ニライカナイから来た訪した神々が人々を祝福し、後にニライカナイへ帰還するという観念や、ニライカナイからユーと呼ばれる豊穡・幸がもたらされることが祭祀のなかで表現されることがある。久高島で、五穀の種子の入った壺が漂着した伊敷浜は、ニライカナイとの接点と考えられている場所であり、この神話は、穀物の種子がニライカナイからの贈与物であることを表現している。家庭で祀る火ヌ神の原郷がニライカナイであることを示す資料もある。
ヌーパレー(野払い)	ぬーぱれー	地域によってはモーパレー(野原払い)というところもある。知念半島を中心に沖縄本島南東部の村で行われる年中行事。知念地区では旧盆明けの7月16日または7月17日の1日、公民館などで数々の芸能(多いところでは30演目ほど)を演じ楽しむ。字知名では公民館から道ジュネーが始まり、「あしびなー」という広場に設置された舞台で、「胡蝶の舞」などの芸能が演じられる。佐敷字外間ではヌーパレーとしてミルクウンケー(弥勒神迎え)が行われ、佐敷字津波古の場天(馬天)では巨大なアーマンチュー(天人)が出て芸能が行われる。なお、この芸能は市の無形文化財指定となっている。「野払い」が原義で、本来は、盆で後生(あの世)から訪れ、まだこの世にさまよっている餓鬼などの霊を追い払い、村を清浄な状態にするための祭祀とみられる。現在は、村遊び的な性格が強くなっている。
布積	ぬのづみ	石と石の継目が横に一直線になる石組。方形の石を使用し、根石から天端石まで一段毎に水縄(石の高さをそろえる為に水平に張る縄)を張り、石の肩を揃えて丁寧に積む。
ヌルドウンチ(ノロ殿内)	ぬるとうんち	ヌドウンチ、ヌルルチなども発音される。本来的には、ノロが居住していた家屋をいうが、ノロ火ヌ神が祀られていることがノロ殿内である必須条件だという。ノロはここでノロ火ヌ神を祀り、日常的に村の平安と豊饒を祈願したわけである。ノロ火ヌ神はノロの住居が移転しても移さず、元の屋敷で祀ることになっていた。現在も各地に残るヌドウンチには、火ヌ神を象徴する鼎型に配置された三つ石が祀られている。例えば、知念グスク傍のチニンヌドウンチ(ノロ屋敷ともいう)が石灰岩の柱を残していることなどから、古くは一般の民家よりも高い格式を持った建物であったことが推察される。
ノッチ	のっち	海の波など、水の流れの作用で岩が浸食を受けてできたくぼみのこと。石灰岩海岸地域に多くみられる。
野面積	のづらづみ	自然石や切り出したままの石を加工せずに使用した石組。野面とは加工していない石の自然の肌はだのことを意味する。
ノロ	のろ	ヌル、ヌールなども称される。沖縄・奄美の村々の祭祀を司る女性の神役。古くは首里王府の任命を受けた公儀の役職で、その就任には「御印判」と呼ばれる「ノロ辞令書」が王府から発給された。『琉球国由来記』に記されるように、1人のノロで1村あるいは複数の村の祭祀の司祭者となった。「のろ」は『おもろさうし』に「のろ」「大のろ」「のろがなし」など出る他、「ばてんのろ」(馬天ノロ)、「しよりのろ」(首里ノロ)など地名を冠した形でも出ている。古琉球以来の基層的な神役で、聞得大君などのように加上された存在とは異なる。
ハーリー(爬龍船)	はーりー	5月4日を中心に、沖縄各地の海辺の地域で行われる舟漕ぎ競争で、豊漁や航海安全の祈願行事。糸満や那覇のハーリーが有名であるが、南城市域では、玉城字奥武や佐敷字津波古、知念字海野で行われている。ハーリー行事は中国から伝来したとされるが、沖縄での始まりは南山の汪応祖が導入したとする説や、那覇西村の長浜大夫なる人物が初めて行った説等諸説ある。また、中国伝来のハーリーとは別に、沖縄本島北部のウンジャミや八重山の節祭等でも舟の競漕が行われる。それらの沖縄固有の船漕ぎ儀礼では、豊作祈願行事としての意味合いが濃いとされる。
白磁	はくじ	陶磁器の一種。白色の素地に透明性の釉薬をかけ、摂氏1200度以上の高火度で焼いたもの。
ハチウビー(初御拝)	はちうびー	新年を迎えて初めて御嶽や井泉など集落内の聖地を参拝すること。ハチウグワン。集落の安全、発展を祈願する。
八幡加那志	はちまんがなし	第一尚氏王統第六代国王尚泰久の四男と伝わる。
パテンヌル(場天ノロ)	ばてんぬる	佐敷間切の女性祭司。パテン大のろくもいともいう。第一尚氏王統初代王 尚思紹の父にあたる佐銘川大主に関する記録『佐銘川大主由来記』には尚思紹の姉妹が場天ノロになったという。『琉球国由来記』巻13-298にはその神名はかつて「テダ白御神」であったとある。第二尚氏の時代になり、一地方ノロと同位の存在となったが、聞得大君の就任儀礼である御新下りの際には重要な役割を果たしていた。
ハナグミ(花米)	はなぐみ	祭祀や儀礼における供物の1つで、生米のことをいう。沖縄本島ではミハナ、ンバナ、宮古ではバナグミ、八重山ではハナグミなどとも称する。洗い米が用いられる場合もある。かつては盆に盛って供えたようであるが、八重山などの一部の地域を除き、現在では花米を入れたピンシーを供えるのが一般的になっている。
ハマウリ(浜下り)	はまうり	⇒サングワチサンニチー

語彙	仮名表記	解説
ハマエーグトゥ(浜祝い事)	はまエーぐとぅ	知念字志喜屋で2月10日から15日の間に行われる動物(牛)供儀を伴う祭祀。豊饒祈願の祭祀とみられる。主祭場は字志喜屋の根屋(村の草分けの家)である親川家。祭祀は前日の拜礼から始まる。当日は早朝から村役一同が集まり親川家で祭祀を始め、大前家・前家・大屋家の各ムートゥーヤー(本家)、水道井ガ泉一、そして集落南方の浜と巡行して祭祀を行う。午後3時頃には再び親川家で祭祀を行い、大前家・前家・大屋家の各ムートゥーヤー(本家)、殿内山、前城井泉、前城山、チチンジャー井泉、親川井泉、産井泉、上前田又新井泉、鼓野、水道井泉、そして集落南方の浜と巡行して祭祀を行う。かつては、親川家ほか3家での祭祀には、生け糞の牛を引いて同家のヒンブンを反時計回りに7回廻らせたという。現在も、最後の浜での儀礼には牛の左足をサバニに載せて神に捧げる。
番所	ばんじょ	球国時代から明治中期まで沖縄島の各間切にあった、間切行政の拠点で、今日の町村役場にあたる。宿次(王府と各地をつなぐ連絡機関)の任にも当たった。明治30年に廃止された。『琉球国由来記』によれば、番所のはじまりは尚巴志時代という。
ヒータチ	ひーたち	久高島で行われてきた大漁祈願の祭祀。1月か2月のミンニーと呼ばれる壬、癸、甲、乙の中から日を選んで行われる。ヒータチは、ハビヤーンと呼ばれる島の北端の岩礁が連なる岬が主要な祭場となり、ヤジク以上の女性たちが参加し、ノロとそのウッチ神がティルル(歌謡)を謡いながらハブイ(トウズルモドキという蔓草)の束を岩礁に打ち下ろす所作が同祭祀の中心部分を構成する。この所作は、男たちが追い込み漁で海面を叩く動作の模倣だとされる。
ヒガン(彼岸)	ひがん	年に2回、春分と秋分の前後に行われる祖先供養祭祀。仏教の彼岸会からの影響。仏壇に餅やシシカマブクと呼ばれる重箱料理を供え、ウチカビを燃やして先祖へ送る。
ヒジャイナー(左縄)	ひじゃいなー	通常と逆の左廻りにした注連縄のこと。左縄は神聖な場所と俗世との境界を示すものとされる。御嶽のイベなど聖地に張り巡らすのに用いる。また、2月のシマクサラシ、カンカー行事では、村落外からの悪疫(フーチ)や悪霊などの侵入を防ぐため、牛や豚の骨片などを左縄に結び、村の入口など村の内と外の境界に左縄を張る。
ビジュル	びじゅる	高さ15cmから1m程の自然石をビジュルと称して信仰の対象にしている例が沖縄各地に広くみられる。ビジュルを安置する洞窟や祠が、ティラとかフトッキヌメー(仏の前)と呼ばれることがある。祭日は9月9日が一般的である。ビジュルは仏教の寶頭盧(びんずる)の訛った語であり、沖縄の霊石信仰と外来の仏教が習合したものと考えられる。八重山でビジリ・ビッチリなどと呼ばれる石は、田畑や牧場、屋敷内などにおいて地神の性格を有する。
ヒヌカン(火又神)	ひぬかん	竈に坐す神で、各家の台所のほか、門中の神屋や村の拝所などで祀られる。ウミチムン(御三物)とも称する。火又神は、生活における火の重要性や太陽神信仰などにより、家や村を守護する神とされた。王府時代には、国(聞得大君御殿)-地方(ノロ・地頭)-門中-家が各々の火又神を祀ることで系統的に結びつけられた。各家で火又神を祀るのは女性で、毎月1日と15日にウブク(盛飯)を供えて祈願する。また結婚や子供の誕生儀礼などでも拜まれる。火又神は12月24日の御願解きに昇天し、大晦日から正月5日頃まで下天すると考えられ、そこには中国電神信仰の影響も伺える。
ヒャクドメー(百度参)	ひゃくどめー	地域によっては「百度の御願」ともいう。ヒャクドメーのヒャクを数字の百と解釈して、人口が百人まで増えるように、あるいは百回もタビをさせてくださいといった祈願だとする民間解釈がある。また、ヒャクドが二十四節気の「白露(はくろ)」と解釈されることもある。ヒャクドの行事が3月と8月に行われている事例が多いことからして、『琉球国由来記』に沖縄本島地域で3月と8月に行われていたと記されている「四度御物参」が、ヒャクドメーにつながる可能性が高い。『琉球国由来記』によれば、久米島では、沖縄本島地域の「四度御物参」と同じ内容の行事である「百度御物参」が2月と8月に行われている。
ヒラウコー(平線香)	ひらうこー	祈願に用いる沖縄独特の黒色板状の線香。木炭とタブノキの皮、芋屑から作られたが、近年は芋屑の代わりにグルテンが使用されている。縦に5本の筋が入り、1枚は6本と数える。1枚を半分に割った3本と、2枚の12本を一組とし「12本3本」と称して用いることが多い。12本は12ヶ月や十二支、3本は天地人や火水土など様々に意味付けされている。
平田子	ひらたぬしー	人名。ヒラタヌシーと呼ぶのが一般的。佐敷間切平田村に関わる人物とみられる。『おもろさうし』や『琉球国由来記』には出てこない。ただ、「佐銘川大ぬし由来記」に尚巴志の事績に「封王の御願玉ひて平田の大比屋男子手登根大比屋唐江御使し」とある。この「平田の大比屋」に関わる人物かと思われるが不明である。
ピンシー	びんしー	本来は、祭祀用の「瓶酒」あるいは酒用の対瓶のことであるが、一般には、拝みに使用する携帯用の蓋付き木箱のことを指す。ピンシー(木箱)は酒瓶や盃、平御香、花米などが収められる形状になっている。ピンシーは近世に考案され、沖縄本島を中心に用いられている。祭祀儀礼に必要な品々が収納されているため、巡拝の御願で重宝されている。
フルシマ(古島)	ふるしま	集落の移動が行われた村で、かつて集落があった場所のことをフルシマと呼ぶ例は多い。シマは村落の意味であり、フルシマは古シマということになる。フルシマに御嶽などの拝所が残っていて、それが祭祀の対象になっている例もある。

語彙	仮名表記	解説
フンシ(風水)	ふんし	屋敷内に祀られている神の1つである屋敷神のこと。風水の文字をあてることもある。石を依り代としていることが多く、その前には香炉が置かれている。特徴的な小さな祠の中にそれらが納められていることもある。フンシを祀る際にはヒジュルウコーと呼ばれる、火を灯さない線香が使われることもある。また地域によっては男性により祀られる。なお、風水には、屋敷神以外に、古代中国に発生した土地の吉凶(善悪)評価法の意味もある。また、風水は、山原では墓の意味でも用いられる。
貿易陶磁器	ぼうえきとうじき	貿易によって得られた陶磁器のこと。グスクの発掘調査で発見される貿易陶磁器は主に中国産である。中国産の他に、朝鮮・ベトナム・タイ・日本産もある。これは、グスク築城・維持過程に日本本土や大陸、朝鮮半島から技術の導入があったことを示している。輸入陶磁器ともいう。
ポントウ(宝珠)	ぽんとう	仏教様式の建造物の最上部に見られるもので、上の方がとがり火炎が燃え上がっている様子を模した玉。仏や仏の教えの象徴とされる。また、五輪塔などの最上部にある相輪の一部のこと。そのような形状を上部に付けた墓なども見られる。
曲玉	まがたま	勾玉とも表記する。祭具の1つ。ノロなどがその神聖性と地位を示す物として身につける。水晶などの鉱物製が多いがこれらは本土からの舶来品。語源は「曲り玉」。琉球ではこの「曲玉」を中心にして多数の円形的水晶玉を連ねて一連としている。『おもしろさうし』に「がはら」「がはらたむ」、『女官御双紙』『君南風由来記』に「玉珈玻璃」と出る。
ミーミンメー	みーみんめー	大里古堅区で行われる4月1日の行事。スティチャーアラシーまたはスリチャーアラシーともいう。4月1日は衣替えの日で、その日から夏服のスティチャーに着替えたという。アラシーは「競う」という意味で、スティチャーを早く織ることと、染めや柄の出来を競うことをスティチャーアラシーと呼んだという。4月1日は歌・踊りで楽しむ日でもあり、後には、首里の赤田のものをまねたミルク神も登場するようになったという。ミルクを伴った道ジュネー(道ズネー)が、照屋門中の本家である照屋家の庭、お宮前、公民館の庭、アシビナー、アシビモーの順に行われ、子どもたちによるミーミンメーの踊りや青年たちによる棒術などが奉納される。
ミシチマ	みしちま	5月15日の稲の初穂祭。一般にはシチュマ。「しこま」が本体で、これに接頭語「御」が付き、ミシコマ→ミシキョマ→ミシチュマ→ミシチマと変化したもの。
ミジナディ(水撫で)	みじなでい	ウビナディ(お水撫で)ともいう。村落の古くからある産井泉などから汲んだ水に、中指を浸して額を3回撫でる行為。古い井泉の水は、生活の源で、その水は生命に活力をもたらす神聖な水であるとの信仰に基づくものと思われる。王府時代、隔年の四月ミシキョマで知念玉城へ行幸した国王は、ヤハラヅカサなどの巡拝地で水撫での儀礼を行った。また、聞得大君の就任儀礼でも水撫でが行われた。水道が敷設される頃まで、多くの家庭では元旦早朝に家の男子が古い井泉から汲んだ若水を仏壇や火又神に供え、主婦が家族の水撫でを行っていた。現在、玉城宇奥武では青年会が産井泉から汲んだ若水を各家に届け、水撫でが行われている。
ミチジュネー	みちじゅねー	ある行事において、一団の人々が芸能を演じながら集落内の道路を行列をなして移動することを道ジュネーといい、公民館などに設置された舞台上で芸能を演じる前に、顔見せ的な目的で行われる場合が多い。また、綱引のときに鉦や太鼓などの鳴り物入りで会場まで綱を移動させることも道ジュネーという。かつての婚姻儀礼において、嫁迎えのために嫁方に出向く婿側の一行のことをスネーイとかスネーヤーと言ったが、それらも道ジュネーのスネーと同語である。
美津葉多武喜	みつばたぶき	第一尚氏王統第六代国王尚泰久の次男。
ミルク(弥勒)	みるく	沖縄のほぼ全域において伝承されている仏教の弥勒菩薩に関する来訪神。大里古堅区にもミルクの面があり、4月1日にミルクが登場する行事(ミーミンメー)がある。八重山の豊年祭や節祭には布袋の面をかぶったミルク神が登場する例が多く、ミルク神によって、ミルク世やミルク世果報という理想的な世がもたらされるという観念が表現される。八重山の古謡には、東方の海上からミルク世(あるいは粟俵・米俵)を満載した船がやって来ることを謡うものが少なくない。奄美、沖縄本島、宮古には、釈迦と対立する弥勒神の説話(「ミルクとサーカ」)が伝承されている。
ムーチャー	むーちー	2月8日にムーチャーと呼ばれる餅を作り子どもの健康祈願をする行事のこと。サンニンやクバの葉、サトウキビの葉などに包み蒸しあげてムーチャーをつくる。子どもの年齢の数だけ編み上げて軒先につるして食べた。また餅を蒸すことでサンニンの香りがついたお湯は鬼の足をやけどさせると言って軒下に捨てた。
ムートゥヤー(元屋)門	むーとうやー	門中の宗家のこと。門中は沖縄の父系血縁で結びついた親族集団。門中制は近世以降に首里・那覇の士族階級から地方農村に広がったとされる。本島南部では腹ともいう。元屋にはその門中の始祖以降の先祖が祀られており、門中祭祀ではその祭壇が拝まれる。また、村の発生と関わる最も古い元家は、村落祭祀で門中を超えて祈願の対象とされている。

語彙	仮名表記	解説
ムンチュー(門中)	むんちゅう	親族集団に対する呼称で、イチムン(一門)ともいう。共通の始祖を中心に父系血縁関係で結びつく人々によって構成され、子どもは父親の門中の成員になる。門中組織がよく整備されているのは沖縄本島中南部で、南部には、門中成員が墓を共同で使用している例も多い。門中の主な機能は墓や門中の本家で祀られる始祖や遠祖に対する祖先祭祀である。17世紀後半に士族階層の間で家譜が編纂されることによって「士族門中」が成立したとされる。家譜をもたない士族以外の門中を「百姓門中」として概念的に区別すると、百姓門中は、士族門中をモデルとして、その多くは近代に入ってから形成されたものと考えられる。
モーアシビ(毛遊び)	もーあしび	モーアシビの「モー」は原野や広場を意味し、若い男女が主としてモーにおいて歌や三線、踊りなどをして遊ぶ習俗をモーアシビと称した。若い男女の社交の場であり、モーアシビを通して知り合った男女が恋愛関係に入り結婚相手を自分自身で決めた場合が多い。明治の末期に学校制度が普及するようになると、風紀上問題があるという理由で警察や教育関係機関によるモーアシビ禁止の指導がなされ、昭和10年代にはほとんどの村で消滅した。
ヤードウイ(屋取)	やーどい	「宿り」が語源。近世期以降、首里・那覇での生活に困窮した士族が地方へ居を移し、農業などで生活を立てるために開いた小村。また、その家。初めの頃は、縁故を頼って移住先を決めるなどしたが、後にはその方途さえなく、僻遠の地に下る例も出るようになった。一般に、地人(百姓)の村落から離れて家を建てるため居住地の分布は散村状になる。そのため、もとの村人との間の交流関係は希薄であり、言語や習慣など首里・那覇の文化をそのまま受け継いで生活した。従って、村落祭祀への参加や、新しい土地での共同の祭祀などを行わない屋取が多かった。
ヤーンナー(家の名)	やーんなー	語源は「ヤー(家)の名」。村の個々の家に付けられた名称。屋号。姓を名乗る前には、このヤーンナーで呼称するのが普通であった。姓にはミョージ、ノージという。
ヤシチヌウグワン(屋敷の御願)	やしちぬうぐわん	2月と8月の彼岸や12月に行う屋敷内を拝む行事。屋敷の四隅や門、屋敷神、便所などを次々に回って、酒・線香・御花・お茶の子などを供え、家族の健康や安寧を祈願する。屋敷の御願は、その家の主婦が行うことが多い。地域によっては、家のナカジン(家の中心の位置)や火又神、仏壇も拝んでいる。
ヤマドゥミ・ヤマアキ(山留め・山開き)	やまどうみ・やまあき	アブシバレーから六月ウマチーの頃までの約2ヶ月の間、稲の成熟を祈って物忌みを行うことをヤマドゥミ(山留)という。稲花が咲き、結実して穂の垂れるまでの間、山で木や竹、茅などを刈ること、鉦鼓などの鳴り物を鳴らすこと、海に入ることなどが禁じられた。物忌みが終わることをヤマアキ(山開き)という。
ユー(世)	ゆー	(代)。時代。また、豊穡にも言う。語源は穀物の稔りをあらわす「よ」。これが「時代→社会」と拡大した。ユガファー(世界報)、アメリカカユー(アメリカ統治下の時代)などを使う。
ユタ	ゆた	沖縄の宗教的職能者は、ノロやツカサなどの司祭者と、ユタ、ムヌシリ、カンカカリヤ(宮古)などのシャーマンに分類される。シャーマンは、神霊や死霊などの超自然的存在と直接的に交渉する能力があると考えられている職能者である。ユタが村落祭祀に関わることは通常はなく、個人の依頼に応じて古いや病氣直しなどに従事している。琉球王国時代のユタは、「人民を惑わす輩」として王府権力によって禁圧されてきた。
ユッカヌヒー(5月4日)	ゆっかぬひー	5月4日の子供のための行事。ハーリーと一体となっている地域もある。本島中南部では、子供たちにとっては好きな玩具などを買ってもらえる日であった。海に近い地域では、この日に舟漕ぎ競争が催されることが多く、玩具市も立ち、子供にとって楽しみな日であった。近年では子供に玩具を買い与える習慣はほぼ無くなっている。
ヨーカビー	よーかびー	8月8日頃から11日頃にかけて行われる行事。悪霊や凶兆が出現する日とされ、夜間に若者たちが高台などに登り、凶兆となるヒーダマ(火玉)が上がるのを見る習慣もあった。悪霊払いのために子供たちは爆竹を鳴らして遊んだ。久高島では8月9日から15日まで一連の行事が行われるが、11日がヨーカビーで、女性たちの御嶽参りなどが行われる。
『琉球国旧記』	りゅうきゅうこくきゅうき	全20巻(本巻9巻、附巻11巻)の漢文文献。1731年、首里王府編。一般に『琉球国由来記』(以下『由来記』)を「漢文に書き改めたもの」と紹介される。しかし、『由来記』の構成とは異なった独自の構成であり、厳密にはそうは言えない。内容的におおまかに云うと「本巻」は『由来記』の巻1～12に、附巻は巻12以降の「各処祭祀」に対応しているようにみえる。しかし、本巻の巻9が『由来記』の巻20・21に対応するように出入りがある。附巻では巻1「神殿」(殿)・巻2「神軒」(神アシャギ)・巻3「嶽・森・威部」(御嶽)・巻4「泉井」・巻8「火神」について記されている。
『琉球国由来記』	りゅうきゅうこくゆらいき	全21巻。1713年、首里王府編。1700年代初め頃から各地(間切)でまとめられた「旧記」や「由来記」を編集して成ったもの。漢字カタカナ交じりの和文と一部漢文よりなる。全体は、王府および首里(巻1～6)・泊(巻7)・那覇(巻8)・唐栄(巻9)、「諸寺旧記・縁起」(巻10・11)、「各処祭祀」(巻12～21)から成る。巻1は「王城之公事」で、王府での祭祀の記録。巻5・6・7・8・12～21には琉球国各地の御嶽・火又神・殿・神アシャギ・神社などの聖地、年中祭祀およびノロなどの神役・供物などが記されており、琉球の宗教・信仰研究の第一級の資料。

語彙	仮名表記	解説
『琉球神道記』	りゅうきゅうしんとうき	浄土宗の僧袋中（生没1552～1639年）の著書。1608年に稿本が成り、1648年出版。全5巻。那覇の馬幸明の求めにより執筆したとある。袋中は薩摩入り以前の琉球に渡来（1603～1606年）、那覇に桂林寺を建て、国王尚寧の信仰を得た。第4巻には円覚寺他、琉球各地の寺の本尊について説明している。第5巻では波上権現など6つの権現を祀る寺など9寺と、天妃・火神・疫神・神楽・鳥居・狛犬、そしてキンマモンについて記されている。キンマモンの項には古琉球の信仰・文化・風俗などが記され貴重である。活字本に横山重編『琉球神道記』（1936。1970年・角川書店版）等がある。
リュウグー(竜宮)	りゅうぐー	この世の幸や豊穡をもたらす海の神の在所で、ほぼニライカナイ(海の彼方、あるいは海の底、地の底にある楽土、他界)と同義に捉えられている。宮古の字狩俣の竜宮ニガイの儀礼など、海辺の地域では竜宮神を祀る行事が行われている。南城市域では、知念志志喜屋の2月の浜エーグトゥウや玉城宇奥武の3月と5月の竜宮神祈願がある。
ワカミジ(若水)	わかみじ	正月の朝に汲み、火ヌ神やウチャトーとして仏壇に供え、家族にミジナディ（水撫で）をするための水のこと。産水などと同一産井泉から汲まれてくることが多い。
キーガン(居神)	キーガン	ウッチガミ（掟神）ともいう。村落祭祀における神役（カミンチュ）の一種。ノロや根神よりも下位に位置づけられ、補助などを務める。全ての村落にいるとは限らない。祭に際して座している神役で、『琉球国由来記』をみると、南城市域における居神は佐敷地区に多い。
ヲナリ神	をなりがみ	兄弟からみた姉妹を指してヲナリといいその逆をエケリという。士族では姉妹をウミナイ、兄弟をウミキという。兄弟にとって守護神としての姉妹の存在をヲナリ神といい、姉妹には兄弟の安全を保証し守護する霊威があるという信仰をヲナリ神信仰という。そのため、沖縄では女性が結婚後も生家において兄弟に対して守護や祝福の霊威を行使する機会が多いとされる。その守護のもと得られた収穫物を返礼としてヲナリ神である姉妹へ贈るという慣行が見られた。この関係性は家庭内のみでなく、村落や国家レベルにもあてはまり、根神・根人の関係性や聞得大君と国王の関係性もこのヲナリ神信仰に基づいている。
ンチャタカビ(三日崇)	んちゃたかび	ミチャタカビ、ミキヤタカビなどともいう。麦稻四祭（2・3・5・6月のウマチー）の前々日から3日間にわたり、神女たちが御嶽にこもって行っていた祭祀。司祭者であるノロや根神などがあらかじめ集まり、精進潔斎をして祭に備えた。